

## 当科の症例からみた神経芽腫マスキリーニング休止の意義

野村 優子<sup>1)</sup> 柳井 文男<sup>1)</sup> 丹生 恵子<sup>1)3)</sup>  
穂吉 秀隆<sup>1)</sup> 畠中 道己<sup>1)</sup> 浅部 浩史<sup>2)</sup>  
満留 昭久<sup>1)</sup>

<sup>1)</sup>福岡大学医学部小児科

<sup>2)</sup>福岡大学医学部外科第二

<sup>3)</sup>福岡大学病院輸血部

**要旨：**2004年度からの神経芽腫マスキリーニング休止にあたり、1996年11月から2003年12月までに当科で診断したマスキリーニングで発見された神経芽腫9症例について検討した。観察期間は7～92カ月間で、診断時の病期はStage I 6例、Stage III 2例、Stage IVA 1例。無治療経過観察を行った1例以外は摘出または生検を行い、3例に術後化学療法を行った。現在まで8例が生存しており担癌生存は4例であるが、担癌生存例のうち3例は治療を終了し残存腫瘍の増大なく腫瘍マーカーは正常化している。摘出腫瘍の予後因子は大半が予後良好群であったが、N-myc増幅例が1例みられ、腫瘍死の転帰を辿った。マスキリーニングで発見された神経芽腫にも一部に治療を要する予後不良例が存在し、今後、新たなマスキリーニングの導入が望まれる。

索引用語：神経芽腫，マスキリーニング，N-myc